

実践報告

オーストラリア幼小中高校一貫校における
課題解決型海外研修について
—2016～2018年度の実践報告—

松井克行

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成31年1月7日受理)

**Educational Report about the Overseas Study Program of Problem Solving Type
in the Australian K-12 School: from the program of 2016 to the program of 2018**

Katsuyuki MATSUI

(Department of Children's Studies, Faculty of Children's, Nishikyushu University)

(Accepted January 7, 2019)

Abstract

The purpose of this educational report is to show the contents of the overseas study program of problem solving type in the Australian k-12 school from the program of 2016 to the program of 2018 and to show the significance of these programs. This overseas study program started in September, 2016. The first program in 2016 was the trial program that was hosted by the international exchange center of the Nishikyushu University. The contents of the first program were 4 days internship activity in the k-12 school named Treetops - A Montessori and International Baccalaureate School, Perth, Western Australia. Three university students belonging to the faculty of children's studies, two students belonging to the department of children's studies and one student belonging to the department of psychological counseling, participated in the first program. The second program in September, 2017 and the third program in September, 2018 were hosted by the faculty of children's studies of the Nishikyushu University. The contents of the second and third program were 6 days internship activity in the same school. The students who participated in the program learned about variety of the approach of childcare and the education by experiencing various difference between Australia and Japan.

Key words : Educational Report 実践報告
the Overseas Study Program of Problem Solving Type 課題解決型海外研修
K-12 School 幼小中高校
Montessori Education モンテッソーリ教育
International Baccalaureate 国際バカロレア

1. はじめに一研修開始の経緯および特色ある同校の教育課程と教育内容一

(1) 研修開始の経緯

2017年度より子ども学部では、オーストラリアの西オーストラリア州のパス市東部のダーリントン(Darlington)の丘の上にある私立の幼小中高校一貫校であるツリートップス・モンテッソーリ&国際バカロレア学校(Treetops- A Montessori and International Baccalaureate School)(以下、同校と表現する)へ夏季休暇中の9月に約10日間の課題解決型海外研修を行っている。

幼稚園から高校生までの園児・児童・生徒数は計107名(2016年)¹と、同校が小規模校であり、ホームステイの受入れ先(同校教員宅や保護者宅)の確保が困難などの理由により、参加学生は3名と厳選されている。過去3年間の内訳は、いずれも「子ども学科2名、心理カウンセリング学科1名」であった。男女比は、いずれも「男1名、女2名」であった。但し、学科間の人数比や男女比に取り決めがある訳ではない。

同海外研修の前身は、2016年度に西九州大学国際交流センター主催で初めて実施された「Treetops インターンシップ」である。初の試みであったため同校訪問は4日間という短期間に圧縮された²。そこで経由地のシンガポールの視察と宿泊(1泊)を加え、2016年9月16~24日の全9日間のプログラムが企画・実施された。企画・運営の中心であった園部ニコル国際交流センター副センター長は、同プログラムの目標を次の5点にまとめている。①教育制度の違い、学校制度の違い、第二ヶ国語としての日本語導入。②ホームステイを通して異文化交流・理解。③日常会話に触れる。④決まったトピックについて日本文化や社会について発表を行う。⑤ネットワーク構築である³。

2016年度に初実施された上記のプログラムは、参加した日本側の学生にとっても、受け入れた同校にとっても好評かつ有益という事で、翌年以降の継続実施が検討された。期間についても「4日間では短いので2週間のインターンシップにしていきたい」との申し出が同校よりあった⁴。国際交流センター内の検討の結果、特に、上述の「①教育制度の違い、学校制度の違い」について学ぶという特色を活かすには、西九州大学の学部の中で、子ども学部の学生のみを対象とするのが妥当であろうとの判断が

行われたようである。ちなみに同プログラムに参加した学生3名は全員子ども学部の学生であった(子ども学科の2年生女子学生2名と、心理カウンセリング学科の3年生男子学生1名)。

2018年1月19日の子ども学部教授会の後、引率された園部副センター長と学生支援課(当時)の石田リカ職員より「Treetops インターンシップ」の報告と、「次年度以降は子ども学部の行事として継続実施する方向で検討して欲しい」との要望が行われた。当初の教授会の予定には無い報告であり、唐突な「継続実施」の申し出があったことも影響し、筆者を含め多くの学部教員は当初驚き戸惑ったが、プログラム内容が非常に魅力的であったことより、子ども学部の各学科の国際交流センター運営委員を中心に検討することになった。

検討の結果、子ども学科では、「あすなろう体験Ⅱ(実践)」(2年)で実施することとなった。同科目は、本来、一般企業でのインターンシップを中心とする内容であり、一般企業ではない保育・教育関係の職場(例:保育所、幼稚園、児童養護施設、小学校)でのインターンシップは認められていない。そのため、保育・教育関係の職場への就職希望者がほとんどである子ども学科の実情とはミスマッチが生じており、毎年、履修希望学生が集まらず閉講となっていたからである。筆者は、たまたま当時、国際センター運営委員と「あすなろう体験Ⅱ(実践)」の授業担当を兼務していたこともあり、国内とは異なる海外の学校インターンシップとして、外国と日本の保育や教育を体験を通じて比較できるという点で、国内の保育・教育関係の職場体験では得られない有益な経験が期待できることより、同科目での実施を強く提案した。最終的にこの案が認められたが、「インターンシップ」という名称は、一般的に「企業インターンシップ」を連想するので、区別の必要から「課題解決型海外研修」という名称になった。

こうして子ども学科では、「あすなろう体験Ⅱ(実践)」として実施されるようになったが、心理カウンセリング学科では、既に企業インターンシップを中心に「あすなろう体験Ⅱ(実践)」の科目を実施していることより、授業外の行事という位置付けとなった⁵。

なお引率教員等の予算に関しては、既に2017年度の学部・学科予算要求の時期を過ぎていたので、2017年度については国際交流センターの予算より支出して頂いた。但し、2018年度からは学部・学科か

ら予算要求し支出することとなった。それゆえ2018年度（今年度）は、子ども学科の予算要求が認められたので学科予算より引率教員等の費用を支出することができた。2019年度（次年度）についても継続して予算要望をしている。但し、文部科学省からの私学助成金の減少等、昨今の日本の大学における厳しい財政状況により引率教員等の予算が付かない可能性もあり憂慮する次第である。

(2) 特色ある同校の教育課程と教育内容

同校は、1989年設立の私立の幼小中高校一貫校であり、幼稚園からモンテッソーリ教育を実施し、11～12学年では国際バカロレア（IB）の「ディプロマ・プログラム（DP）」を2007年度から実施している。さらに11～12学年では国際バカロレアの「キャリア関連プログラム（CP：Career-related Program）」を選択プログラムとして用意している⁶。CPは、16～19歳までを対象としたキャリア教育・職業教育に関連したプログラムであり、生涯のキャリア形成に必要なスキルの習得を重視する（2012年に新設）⁷。「キャリア関連プログラム（CP）」を選択プログラムとして用意している理由は、大学以外の職業系の高等教育機関に進学する高校生のニーズに応えるためである⁸（これに対し、日本のIB実施高校では、もっぱら海外の名門大学への進学というニーズのためDPのみでCPを併設している高校は皆無である⁹）。従って、同校の卒業生の多くは、DPやCPを履修後の最終試験に合格し、大学入学資格（国際バカロレア）を取得しても海外に進学する学生はほとんどいないという¹⁰。

話をDPに戻そう。DPのカリキュラムは、6つのグループ（教科）及び「コア」と呼ばれる3つの必修要件から構成されている。6グループとは、「1言語と文学（母国語）」、「2言語習得（外国語）」、「3個人と社会」、「4理科」、「5数学」、「6芸術」であり¹¹、同校では「2」に日本語が位置付けられている。「コア」（3つの必修要件）とは、「課題論文（EE: Extended Essay）」、「知の理論（TOK: Theory of Knowledge）」、「創造性・活動・奉仕（CAS: Creativity/Action/Service）」である¹²。

DPの「コア」の中で、国際バカロレア（IB）独自の学習内容が「知の理論」である¹³。教育学者の福田誠治によれば、「知識そのものを根源的に問い直すことで、個々の学問分野の知識体系を問い直し、理性的な考え方を客観的な批判的精神を養っていくこ

と¹⁴」がねらいとされている。

同校では、モンテッソーリ教育かつ少人数クラスによって幼稚園から小中高等学校を通して培われた資質・能力が国際バカロレア（IB）の「ディプロマ・プログラム（DP）」により評価されるのである。「ディプロマ・プログラム（DP）」の試験は、北半球の学校では5月、南半球の学校では11月に実施される¹⁵。同校では、私たちが訪問した9月中旬の「日本語」の授業でも試験対策として試験に類似した問題演習が行われていた¹⁶。例えば、「文章読解問題」と文法を問うような問題（日本の高校入試レベルの英語の試験の日本語版のようなもの）や、状況を設定した上で書くべき内容を指示した作文（例：「あなたの学校であたらしい食どうができました。しんぶんきじを書いてください。いつあいていますか。どんな、食べものがありますか。食どうのよいてんはなんですか。二つ書いてください。」）等である。特に、後者の作文は、生徒が想像力を膨らませて書く余地がある。少なくとも「この日本語文を英訳せよ」等の日本の英作文の試験問題よりも楽しく書けそうである。

さらに注目すべきは、モンテッソーリ教育と国際バカロレア（IB）は、相互に関連しているというのが、同校の考え方であり、モンテッソーリ・メソッドが国際バカロレア（IB）の「ディプロマ・プログラム（DP）」（11～12学年）と効果的に統合されている、と同校HPでも謳われている¹⁷。これに関し、日本におけるモンテッソーリ教育が幼稚園・保育園などの就学前教育中心であることより¹⁸、初等中等教育におけるモンテッソーリ教育に関するイメージが沸きにくいかもしれない。筆者も同様の違和感を持ち、帰国後に調べてみた。門外漢ゆえ要領を得ず、浅い認識に留まり恐縮だが、知り得た情報をいかに手短かに述べる。

モンテッソーリ教育の創始者マリア・モンテッソーリの著書『児童期から思春期へ—モンテッソーリの一貫教育—¹⁹』によれば、子どもの発達段階は、大きく三段階に分けられる。①0歳～7歳（さらに最初の2年間、3歳～5歳、6歳と7歳の3つに区分される）、②7歳～12歳（思春期直前までの時期）、③12歳～18歳（思春期）である。ここで注目すべきは、「発達段階の第一段階に用いて役立つ原理は発達段階の第二段階に用いなければならない原理とは異なって²⁰」いる点である。第一段階の変化を「成長」と考えるならば第二段階の変化は「変態」であ

ると彼女は捉えている²¹。

具体的には、第二段階（7歳～12歳）の児童は行動の範囲を広げることが必要であり、子どもが自分で品物を買うことを直接経験し、その国の通貨で何を買えるかがわかるようになる必要がある。また、より広い社会において社会的関係を確立する必要がある、学校が閉ざされた抑圧空間にならぬよう、教育が子どもの真の天性を抑圧せぬよう留意する必要がある。さらに、第二段階は、感覚的で具体的な段階から知的で抽象的な段階への移行を意味する。また、道徳的側面における敏感期でもあり、良心、正義の概念が誕生し、同時に自分の行為と他人のニーズの間関係についても理解できるようになるという²²。

このような第二段階（7歳～12歳）の児童への教育において重要なことは、児童に「自由と独立を与えながら、さらに続いて現実を発見するような活動に興味・関心を持たせること²³」である。具体的に教員は、個々の事物を全体の一部として理解した上で児童に提示しなければならない。そうせねば児童に興味を喚起させることができないからである。従って教員は控え目になって子どもを愛し理解するだけでは足りず、まず宇宙を愛し理解しなければならない。全ての事象が宇宙において相互関連を持つことを児童に示さねばならないからである。そのため教員は準備し努力する必要がある、あらゆること全てを提示できないので、児童の想像力に働きかけなければならない²⁴。

他方、第三段階の12歳～18歳（思春期）の生徒への教育についてマリア・モンテッソーリは、イギリスのエリート校（例：イートン校）のような全寮制学校（思春期の子どもの中学校・高等学校）を理想とし、家族と離れて田園の静かな環境下で、勉強と仕事をバランスよく行うことを提案している。その理由としては、思春期の生徒に活動と多様な経験豊かな生活の場を与えることの重要性を挙げている。これは幼児期における「日常生活の練習」の原理の展開でもある²⁵。また、第三段階（12歳～18歳）のカリキュラム（学習と仕事の計画）の目標は「人格の安定化」で「子どもへの尊敬」が最重要となり、秩序を保つため最小限の規則の下、生徒の自主性が重んじられる。具体的な教育内容は次の3点である。「①自己表現への機会」として、あらゆる種類の芸術的活動が奨励され、「②心理的発達についての教育」として、「道徳教育、数学、言語」の三教科が

挙げられている。これらは人格形成のために不可欠と考えられているからである。「道徳教育」は全ての基礎をなし、「数学」なしには現代に特有な発達のいかなる特定の形式も理解できず、その進歩に参加することも不可能となり、「言語」は思想を現し、人間同士の理解を確立するための手段となるからである。「③大人の生活のための準備教育（一般教育）」の内容は、三つに大別される。「1. 地球と生きている自然の学習」〔地質学、地理学（有史以前を含む）、生物学、宇宙学、植物学、動物学、生理学、天文学、比較解剖学〕、「2. 人間の進歩と文明の形成に関する学習」〔物理学、化学、力学、工学、遺伝学〕、「3. 人類の歴史の学習」である。さらにこれらに加えて、特定の課題学習や「時事問題と国民」、憲法や法律などの特別な学習を行うべきとしている²⁶。さらに、「実践上の注意点」として、障害児の学校への受け入れを肯定している²⁷。

以上、初等中等教育におけるモンテッソーリ教育の概要について述べた。モンテッソーリの見解は、必ずしも同校の教育内容や国際バカロレア（IB）の「ディプロマ・プログラム（DP）」や「キャリア関連プログラム（CP）」と一致するものではない。特に、12歳～18歳（思春期）の生徒への教育に関する「田園学舎²⁸」と一般的に表現されている全寮制の学校構想は、同校の現状とは全く異なる。

但し、著書『児童期から思春期へ』の訳者が述べるように、「女史（筆者注：モンテッソーリ）自身もすべての中学校を田園学舎に変えることが出来るとは考えていない。ユートピア的思想ですが、しかし女史はすべての中学校・高等学校が、少しでもここから学ぶべきことがあるのではないかとしています²⁹」というように理解すれば、全寮制の田園学舎ではない同校だが、パース市郊外の丘の林の中にあり、自然環境に恵まれているのは確かである。

さらに、入学前教育から続くモンテッソーリ方式における、例えば一人一人の児童生徒の興味関心を大切にしながら児童生徒に選択させる点、教員主導で教え込むのではなく、児童生徒の自主的な学習意欲の喚起のため学習環境の整備に配慮する点等の方針は、小学校以降も確実に受け継がれている。例えば、同校の日本語教師のシャロン（Sharon Crossman）先生を紹介するHPには、“I do not teach anyone. I only provide the environment in which they can learn”³⁰と書かれている。「私は誰にも教えない。私はただ児童生徒が学習可能な環境を準備して

提供するだけである」という意味になる。これはシャロン先生の教育哲学の最善の要約であり、著名な物理学者アインシュタイン（Albert Einstein）博士の言葉であると同校 HP では説明されている。しかし、この文章は、モンテッソーリ教育の考え方を示したものととも考えられるからである。

なお2016年度に引率された石田職員によれば、「各クラスでのカリキュラムをモンテッソーリ方式で行うか、公立校と同じカリキュラムを組みこんだりするかは、クラスの理解度に応じ、教員の差配に任されていた³¹」という。小学校においては、日本と同様、音楽以外は学級担任が教えるのであるが、教材の使用や授業の進行等において、日本の公立小学校と比べると自由度が極めて高い。授業時間も50分、55分、65分と長くゆとりがあった。表1を見ると各時間の間に休憩時間が無く慌ただしそうだが、実際はチャイムもなく、かなりアバウトな「すきま時間」があるのだ。時間厳守ではなく緩やかにかつ落ち着いた時間が流れていくのである。産業革命以降の工場労働者の養成の要請に端を発し、時計とチャイムに追われ、慌ただしさと緊張を強いられ、規則で縛り、型にはまった児童生徒の育成に追われる「抑圧空間としての学校像」とは対極の学校文化がそこにはあった。

小学校は、2学年ずつの複式学級であり、担任の教員は各1名なので、教室内で他の児童とは別の課題をしている児童もよく見られたし、椅子の代わりに「バランスボール（バランス感覚や体幹を鍛えるためのエクササイズで使われる両手で抱えきれないぐらい大きいゴムボール）」に座っている児童もいた。さらに授業中にトイレ等も気軽に行ける等、日本の小学校とは大違いである。例えば5・6年のクラスでは、昼食のピザをみんなで手作りして調理しながら別の授業も平気でしている。ピザの匂いが教室内に充満していてもお構いなしである。しかし、その後、ちょっとした事件が起きた。アリたちがピザを狙って大挙して押し寄せたのだ。幸い、授業見学をしていた日本人大学生がこれに気付き教員に知らせると、すぐさま授業は中断され、みんなでアリの来ない場所へピザを緊急避難させ、なんとか難を免れることができた。

2時間目終了時の休憩は、正真正銘の「ティータイム」であり、先生方は談話室に集まり、紅茶やコーヒーを飲み、皆が家より持参したお菓子をほおぼり談笑や情報交換をするのである。筆者は、以前は高

校教員であったが、小中学校に比べると楽な勤務体系であるものの、授業間にこうした至福のひとつを満喫したこと等ついぞ無かった。共に談話室にてくつろいでいる学生たちに「貴重な経験だよ」とつい声を大きくした。「働き方改革」のさらなる進展により、未来の日本の学校においても目にしたい光景である。

さらに日本とは異なり、児童・生徒は授業中の出入りも自由であるし、何より驚いたのは、授業中の飲食もOKということである。授業中の空腹は子どもの集中力を欠くということで認められるそうである。いささか滑稽ではあるが、授業中に生人参のスティックをボリボリかじる児童・生徒が、ごく当たり前に見られた。

6時間目が終わると、日本のような部活動はないので、特別のイベントが無ければ、皆、帰宅する。送迎は保護者が自家用車で行なうのが一般的である。毎日15時30分頃には、学生たちもホームステイの家族と共に帰宅していくのである〔筆者は、日本語教員のシャロン先生の御自宅にホームステイしていたので、職員会議のある火曜日（放課後、職員会議が1時間程度ある）以外は、16時前には学校を出て帰路についた〕。長時間勤務が常態化している日本の小中高等学校では考えられない幸せな日々であった。

また、同校の特色として、2016年度引率の石田職員や2017年度引率の桜井教授が述べているように「公立では受け入れが厳しいと判断された発達障害の子どもも受け入れている³²」ことを付加しておく。障害児の受け入れと共生は、モンテッソーリの主張とも共通している点は、前述したとおりである。

表1 「ツリートップス・モンテッソーリ&国際バカロレア学校の1日の時間帯」

始業前	8:20~8:30
1時間目	8:30~9:35
2時間目	9:35~10:30
休憩	10:30~10:50
3時間目	10:50~11:40
4時間目	11:40~12:30
昼食1	12:30~12:50
昼食2	12:50~13:25
5時間目	13:25~14:20
6時間目	14:20~15:15

SHARLON, Term 3, 2018 (シャロン先生の2018年第3学期の時間割)より筆者が抜粋。

筆者は、国際交流センター運営委員（2016、17年度）として、また「あすなろう体験Ⅱ（実践）」の授業担当者（2017、18年度）として、この海外研修に関わり、2018年度は引率教員として現地に同行した。その立場より3年間の取組みの概要を報告する。

2. 2016年度研修－国際交流センター主催のプログラムとして初実施－

2016年9月16日（金）～24日（土）の9日間、同校を研修先とする第一回の海外研修が実施された。引率教員1名、引率職員1名、子ども学部学生3名の参加である。

引率教員は、園田ニコル国際交流センター副センター長。引率職員は学生支援課（当時）の石田リカ

表2 「2016年度研修（オーストラリア・インターンシップ2016）の概要」（事前学習を除く）

	日程	事項
1	9月16日(金)	福岡空港出発(10時)、シンガポール1泊。
2	9月17日(土)	シンガポール発(10時)、パース空港着(16:40)、空港解散(17時)、各自ホストファミリー宅へ(各家庭が自家用車で送迎)。
3	9月18日(日)	各自ホストファミリー宅で自由行動(観光等)。:引率教員&職員は、学校を下見。
4	9月19日(月)	8時30分、学校集合。スケジュールの確認とオリエンテーション。校長への挨拶。 午後、学生は各クラスへ分かれて活動(幼稚園、小学校5・6年組、高校)。 15時30分～16時30分、1日の振り返り。
5	9月20日(火)	午前、日本語学習クラス(12年組、10・11年組)で各学生がプレゼンテーション(出身県の紹介)、日本語学習クラス(3・4年組)で各学生によるクイズ(「スポーツを漢字で書くとどうなる?」)。 午後、日本語学習クラス(幼稚園)で学生が「日本語の手遊び」を教える。日本語学習クラス(1・2年組)で「日本語の手遊び」と「ナガーラ(西九州大学のマスコット人形の紹介)」。
6	9月21日(水)	全校集会(国連平和デーに合わせ『平和セレモニー』)、午後、学生は各クラスへ分かれて活動
7	9月22日(木)	全校集会。1学期の終了式(学習成果の発表会)。 (同校の「太鼓クラブ」による演奏あり)
8	9月23日(金)	午前中、近隣のHelena College(在校生600名の私立中高校)を見学。 午後、パース空港出発(17時10分)、シンガポール空港着(22時20分)、シンガポール空港発(1時20分)。
9	9月24日(土)	福岡空港着(8時)、解散。

園部ニコル・石田リカ「オーストラリア・インターンシップ2016 報告書」の「研修期間の詳細」を基に筆者が簡略化し作成。

職員。学生は子ども学科2年生の女子学生2名、心理カウンセリング学科の3年生の男子学生1名である。国際交流センター主催のインターンシッププログラムであったので、参加者の選考や事前指導に子ども学部の教員は関与していない。

しかしながら、全学科の学生を応募対象としているものの、幼小中高校一貫校がインターンシップ先ということもあり、幼児教育や学校教育への関心が高く、幼稚園教諭、小学校教諭(子ども学科)、特別支援学校教諭(心理カウンセリング学科)への就職を希望する学生が多い子ども学部に応募者が偏り、次年度以降、子ども学部の行事への移行問題が浮上したものと推察される。

平成28年度『Treetops インターンシップ』報告書³³より、参加教員や学生の記述の中で特筆すべき点を挙げる。

発達障害児に関する特別支援教育について、石田職員は次のように述べている。「公立校での受入れを難しいとされた児童や、保護者が児童の学習支援が必要であると考え自ら入学を希望する発達障害児の入学が近年増加しているとのことであった。低学年のクラスには特別支援を必要とする児童が多数在籍していた。特に1・2年生(Wattle)は、在籍児童34名中、8名が特別支援を必要としていた。…略…通常授業と並行して、フォニックス(Phonics)の授業を実施。フォニックスとは、英語圏で子供達に英語をどうやって読むかを教えるのに広く使われている教育方法。英語のつづりと発音の関係を学ぶことで、知らない単語も推測してだいたい正しく発音できるようになり、子どもの学習意欲を図るものである。Treetopsには、フォニックスの専門教諭が1名、心理カウンセラーが2名在籍。特別支援を必要とする児童は別室にて2名ないし3名に分かれ、このフォニックスの授業を受ける。また、クラスの中に問題行動を起こす児童もいるため、指示に従うことを習慣づけるために、30分授業を行った後、Brain Breakの時間5分を取る。学年初頭からこのパターンを繰り返し、半年たった9月時点で授業中先生の出す指示に対して反応できるようになっていた。ほかの子どもと同じように行動できないというフラストレーションから、自分にもできるという実体験を繰り返し教えることで、発達障害の子どもも自然にクラスの中に溶け込み、行動出来ていた。発達障害児は、小学校～高等学校まで全学年に在籍しており、先生方はきめ細やかな指導を行っていた³⁴」。

上記の指摘は、モンテッソーリ教育と国際バカロレア以外のさらなる同校の魅力の指摘（特別支援教育）として注目に値する。心理カウンセリング学科から唯一の参加者であった3年の男子学生は、特別支援学校の教諭を志望していることより、フォニックスの授業を見学することができた。「日本でいう発達障害や学習障害の子にあたると感じた。しかしクラスの中でこの子たちが浮いている印象を受けなかった。…略…教員の努力によるものだと感じた。この時、驚いたことがこの教育を行っているのがジェーンさん一人だけであるということであった。教頭先生が幼稚園から高校生までの学校全体を走り回っている姿が印象的であった。その分子どもたちのことを真剣に考えていることがとても伝わった³⁵⁾。この学生の素直な感想から、フォニックスの授業見学を通して大きく心を動かされ、ジェーン（Jayne Simpson）教頭先生の御活躍に感銘を受けたことが伺える。

3. 2017年度研修—子ども学部の記事に組み込む—

2017年1月19日の「子ども学部教授会」の直後、園田国際交流センター副部長と石田職員から、「オーストラリア・インターンシップ2016」の説明があり、「1. はじめに」に記載したような紆余曲折を経て子ども学部の行事となった。

2017年度の実施日程については、子ども学科の桜井琴音教授とシャロン先生との事前の詳細な電子メールによるやりとりで決定した。その際、考慮したのは、日程的に例年9月初旬に計画されている、科目「学校インターンシップ」（2年生）の集中授業との日程調整である。この科目は「小学校教員を目指す学生は全員受講³⁶⁾」が原則であることより、「学校インターンシップ」全日程終了後に研修開始とする必要がある。また9月下旬より後期授業が開始することより、後期授業開始日までに研修終了（帰国）する必要がある。以上の制約から、研修期間は12日程度とせざるを得ないことが明らかになった（同校は2週間程度の研修を望んでいたが、若干、短くなるのである。そこで、少しでも研修期間を長く取ろうという判断から「後期ガイダンス」後の帰国となった）。

2017年度研修では、ホストファミリーとの自由行動を利用して「パース日本人学校」を訪問した学生

表3 「2017年度研修の概要」（事前学習を除く）

	日程	事項
1	9月13日(水)	福岡空港出発（11時35分）、バンコクで乗り継ぎ。
2	9月14日(木)	パース空港着（7時45分）、ツリートップス校が手配したワゴンタクシーで学校へ。10時50分～12時30分、高校生の日本語授業を見学。午後はキャンパス内見学、オリエンテーション。
3	9月15日(金)	各クラスの授業見学、5・6年生クラスで折り紙指導。
4	9月16日(土)	休業日（ホストファミリーと自由行動）
5	9月17日(日)	
6	9月18日(月)	学生は1名ずつ分かれて授業見学。
7	9月19日(火)	日本語の授業のアシスタント（7・8年組、3・4年組）
8	9月20日(水)	学生は1名ずつ分かれて授業見学。
9	9月21日(木)	午前中、全校生徒による集会に参加。
10	9月22日(金)	休業日（ホストファミリーと自由行動）
11	23日(土)	パース国際空港発（9時20分）、バンコクで乗り継ぎ。
12	24日(日)	福岡空港着（8時）、解散。

桜井琴音「海外出張（派遣）復命書」西九州大学子ども学部子ども学科、学科会議、2017年10月2日（内部資料）より抜粋。

も出るなど、初年度の経験を活かしつつ、より発展的なプログラムへの深化が見られた。

2017年度研修の意義について、引率教員の桜井教授は次のように記している。「今回のような学校現場に特化した研修は、海外の教育に触れることができる貴重な機会であるといえる。…略…故郷紹介のプレゼンテーション、幼稚園児や小学生を対象に日本の子どもの歌や手遊びの紹介は、全て英語で行った。学内外での全ての活動が英語であったことから、1週間後には会話力の向上が見られるようになった。このような学生の成長は、現地の先生方からも評価を得ることができた。…略…そのため、今後、このプログラムを継承していくためには、研修期間中の引率者による学生たちへの精神的なサポートは必要であろう³⁷⁾」。

上記の指摘のうち、最後の「研修期間中の引率者による学生たちへの精神的なサポート」の必要性の指摘は重要である。本研修は、全宿泊がホームステイであるため、特に入国後の1泊目が大変である。学生とホームステイ先の御家庭との未知との出会いと生活が待ち受けているからである。もちろん事前に自己紹介の資料やメール等を送受信しているが、会うのは初めてで、よい出会いになるか、相性が合うのか、どういう生活ルールなのか、御土産は喜んでもらえるか、等の出発前からの不安が既に満ちて

おり、そこに遠距離移動の疲れ、オーストラリアという英語圏に着いたばかりの戸惑い等が覆いかぶさり、緊張が極限状態となるからである。

そこで第1週目の引率教員の役割は、参加学生とホームステイの御家庭との間の意思疎通の不全によって生じるであろうトラブルを未然に防止することに尽きると言ってよい。そのために参加学生への最低限の精神的サポートと、可能な範囲での物理的調整(例：送迎時間の変更)を同校日本語教師のシャロン先生と連携して進めなければならないからである³⁸。同校への送迎、食事(お昼のお弁当を含めて)。休日(土日)の予定等、基本的にホームステイ先の御家族の支援に頼っていることより、本研修のホームステイ依存度は極めて高い。

次年度以降、引率教員が無くなる可能性をシャロン先生に伝えた所、「非常に困る」と驚かれた。シャロン先生と参加学生とも初対面であり、そこでの意思疎通も始まったばかりであり、手探り状態というのが実情だからである。

ちなみに2018年度は、特に第1週目の登校後、すぐに参加学生を集め、ホームステイ先での暮らしについての情報交換をさせた。「食事の内容、量」、「シャワーの時間」、「家族との交流」等、お互いに話中

で不安が解消するからである。例えば、事前学習で、昨年度に引率された櫻井教授より「オーストラリアは水不足だからシャワーは3分までしか許されない」と伺っていたが、実際は、どのホームステイ家庭でも、そのような制限が無かったことが分かり、皆、ホッとした(今年は雨が比較的多かったことによる)。日本人とシャロン先生が集まれば、日本語を話すことができるという点でも、学生たちは一息つけるのである。

なお、2017年度より、子ども学科の「あすなろう体験Ⅱ(実践)」(2年生の授業に組み込んだことにより、毎年1月上旬に実施される全学の「あすなろう体験活動報告会」で、参加学生による報告が行われるようになった。図1に見られるように、当該参加学生の発表資料から、配慮を要する小学校児童への指導の側面への関心が高いことが推察される³⁹。

4. 2018年度一履修希望者が多く、初の選考による派遣者決定一

(1) 初の派遣者選考について

4月の「2年生オリエンテーション」時に、授業の説明をした所、履修希望者が4名(子ども学科3名、心理カウンセリング学科1名)と、定員よりも1名多かった。そこで両学科の3名の担当教員で話し合った結果、まず定員の1名増加の可否を同校に相談することとなった。

2017年度に引率された櫻井教授が、電子メールで同校の日本語担当のシャロン先生と相談し、学校自体の受入れ可能数やホームステイ先の受入れ可能数を考慮した結果、3名という枠の変更は不可能との結論に達した。

以上の経緯により、初の選考を行う事となった。以下の「確認事項」を応募者に確認した上、「課題作文」を課すことにした⁴⁰。

【確認事項】

- ・パスポートの取得の有無。
- ・「グローバル・コミュニケーション(英語)」⁴¹の履修の有無。
- ・ホームステイへの適応力を要する。
- ・Treetops校及びホームステイ先では、個別での行動力が必要。

【課題作文】

- ・テーマ「オーストラリア研修で学びたいこと、研修の経験をどう生かしたいのか」について、自分の



図1 「2017年度研修参加学生が作成した発表資料」(2017年度研修参加学生による発表資料より一部抜粋)

考えを述べる。(1200字程度、A4の横書きで1枚、PCで打つ)

【選考方法】

・受講希望者多数の場合は、面接・書類(課題作文)・成績で選考する。

(面接の日時については、後日、連絡する)

・成績の評価 GPA

英語力(「グローバル・コミュニケーション(英語)」の評価、英検やTOEIC)を重視。

【選考過程】

面接、書類(課題作文)・成績の資料を基に、担当者3名により選考会議を行ない、厳正な審査の結果、「子ども学科2名(男女各1名)、心理カウンセリング学科1名(女性)」を選定した。審査内容は割愛するが、資料を基に公正かつ総合的に判断した。

(2) 出発準備における留意事項

筆者が関わった準備過程における留意事項を以下に記す。

①日程の決定と航空機の予約

日程については9月上旬から下旬という大枠は決まっているが、その詳細は同校の担当教員(日本語教師のシャロン先生)と電子メールでやり取りしながら決定していかねばならない。

また、学科予算の執行の可否が決定しなければ、航空券を購入することができない。航空券の購入は、参加学生が決定し、引率教員の派遣の可否が判明し、参加者全員のパスポートの取得が終わった後、初めて可能となる[パスポートの発券手続きや、航空券の購入手続き等は、全て学生各自に経験させるようにしている。何事も経験である。なお旅行保険について入るかどうかも学生各自の判断に任せた(海外では医療費が高額になること。旅行業者以外でも申し込めること。クレジットカード付帯の保険もあること、大学入学時に加入している保険に追加する方法もあること等の説明をした後、判断は各学生に委ねた。高校生の研修旅行とは異なり19歳~20歳の青年として相応の判断力と自律性を求めるためである。また学生支援課より『海外危機管理』(国際交流センター発行)を頂き、配布・説明した]。

2018年度は、旅行業者を介在し、5月25日に第1回の航空券の見積書を出して頂いた。日程に合った航空券をいかに安価に入手できるかどうか、経由地をどうするか、といった判断が必要となるからである。また参加学生3名と引率教員1名、合計4名分

の航空券を同一便で買わねばならないという点での制約がつく(しかも引率教員旅費の学科予算申請が認められたか否かが判明しない間は購入手続きができない。また航空券購入のためには参加学生のパスポート番号が必要となるので、全員のパスポート発券を待たねばならない。結局、航空券の購入を完了し旅行業者から航空券のチケットが送られてきたのは7月5日であった)。

なお福岡空港からオーストラリアのパースへの直行便は無い。2016年度はシンガポール航空を使用したのでシンガポール経由となった。2017年度と2018年度は、タイ航空を使用したのでバンコク経由となった。ところが2018年度は帰路、乗換機の突然の機体トラブルに見舞われ、真夜中に急遽バンコク泊となり半日帰国が遅れた。2019年度以降、引率教員の予算が廃止された場合には、少し高価となっても(早めに航空券を買うことができれば安価に行けるという話もある)、使用飛行機が比較的新しく、トラブルが起こりにくいと言われているシンガポール航空の選択を検討する必要があると思われる。

なお経由地において時間的には空港外へ出て市内観光や食事することも可能だが、2017年度と2018年度は行わなかった。肝心のオーストラリアに行く前にトラブルに見舞われるリスクや学生の疲労を考えてのことである。これは2019年度以降も継続するよう申し送りする次第である。

②ETASについて

ETASとは、電子渡航認証(Electronic Travel Authorization System: ETAS)の略である。オーストラリア政府が、オーストラリア入国ビザが免除されている国籍の渡航者に対し、ETASの取得を義務付けている。渡航直前の申請も可能だが、オーストラリア政府は、渡航計画を立て始めた早い段階での申請を勧めている。出発前にオンライン申請をしてETAS認証を受けておかないと、飛行機や船でオーストラリアに入国できなくなる⁴²。オーストラリア政府移民局の公式HPから20オーストラリアドル(1,545.23円⁴³)で申請することが可能であるが⁴⁴、民間代行業者に頼んだ方が随分格安な状況にある。旅行業者に頼むと4000円以上かかる場合もあるが、インターネット上では500円のみで可能という代行業者もあった。インターネット上の安い代行業者を使用した方から、特に問題なかったとの情報を得たので思い切って使ってみた。まず試しに自分が行った後、学生に紹介して手続きさせた。結果、無

事にオーストラリアへ入国できたので、次年度以降も継続するよう申し送りたい。

③携帯電話、インターネット環境

携帯電話については、海外で使用できるようにしておくことと安心である。空港等では無料 wi-fi が使えるので、スマートフォンであればインターネットを使って LINE やメールも使用できる。しかし現地（パース）は、意外とネット環境がよくない。同校やホームステイ先の無線 LAN を使用させて頂いたが、回線の込み具合等により使用不可の時も多く不安定である。そこで海外利用用のモデムを出発前に借りておくのがお薦めである（事前に申し込んでおけば、福岡空港で借用・返却できて便利である）。モデム 1 台で、スマートフォンもノートパソコンもインターネットが使用可能となった。特に、研修期間中は、大学の職務に関するメールも多く、書類作成等の用務もあり、引率教員にとってインターネット環境の構築は必須である。なお、2018年度は、モデムが使用できない経由地のタイのバンコク市内で現地泊という緊急事態に陥ったが、幸運にも航空会社より提供されたホテルの無料 wi-fi が使用できたので、日本に連絡することが可能となった。

④クレジットカードについて（JCB は使用不可）

発行までに時間がかかるので、早目に作るように指示した方がよい。パースでは、JCB カードが使用できなかったが VISA や MASTER は使用できた。不運にも学生の 1 人は、JCB カードしか持っていなかったため、手持ちの現金しか使用できなかった。

⑤参加費・滞在費（インボイス）の国際送金について

参加費・滞在費（インボイス）として、同校に 600 オーストラリアドル（46,502.30円⁴⁵）を出発前に支払う必要がある。国際送金を行なうのだが、手数料も高く大変である。2018年度は、8月29日に突然支払いを求めるメールが届き、9月4日が支払期限とされた。実は、このような短期間に、同校が指定するオーストラリアの銀行口座に入金するのは事実上不可能である。

簡単な方法は郵便局（佐賀北郵便局に慣れた職員さんがいる。それでも手続き完了までには数時間かかるということであった。）へ行き、国際送金を行うことである。学生たちにはまとめて代表学生より 3 名分送付するよう指示した（その方が手数料は安くなる）。教員用は、総務課に御願した。日本は、土日は金融機関が休むので遅れること。手続きを行っても現地に届くには遅くて 10 日かかるというの

表 4 「2018年度研修の概要」(事前学習を除く) (筆者作成)

	日程	事項
1	9月11日(火)	福岡空港出発(11時35分)、バンコクで乗り継ぎ。
2	9月12日(水)	パース空港着(7時45分)、ツリートップス校が手配したワゴンタクシーで学校へ。「トビタテ留学 JAPAN 地域人材コース」にて再度、同校にて研修中の 4 年生学生がガイドとなりパース市内観光を実施。
3	13日(木)	中学校(7・8学年)と高校(9・10学年)の 2 クラスの日本語授業で、日本紹介(学生各自の出身地)についてのプレゼンテーション(学生各自、1人10分程度の発表と質疑応答)。
4	14日(金)	小学校(5・6学年)と高校(11・12学年)の 2 クラスの日本語授業で、日本紹介(学生各自の出身地)についてのプレゼンテーション(学生各自、1人10分程度の発表と質疑応答)。 昼休みに「折り紙クラブ」に参加。
5	15日(土)	休業日(ホストファミリーと自由行動)。
6	16日(日)	
7	17日(月)	各学生は、幼稚園クラスでの教材づくり(「福笑い」)。希望のクラス見学。
8	18日(火)	シャロン先生の日本語クラスの授業のアシスタント(1~6時限全て)。1・2年組日本語クラスでは「手遊びゲーム(猛獣狩り)」。幼稚園クラスで「福笑い」。
9	19日(水)	遠足の日。 中高生(7-12年)は貸切バスでパース市内へ。 午前中は、西オーストラリア州議会見学。近所の公園で昼食(弁当)後、徒歩で「インドア・クライミング体験」終了後、貸切バスで帰校。学生1名と筆者が参加。 小学生(1-6年)はスケート(市内のスケートリンクにて)。午前中で終了。学生2名が参加。
10	20日(木)	平和セレモニー〔国連平和デーに合わせて毎年実施。集会場の中心に「平和の木」(全園児・児童・生徒が描いた手形が「葉」として茂っている)〕がある。短時間の全校集会(その中で日本人学生の紹介と記念品受贈)。終了後、「日本食レストラン(日本語授業)」。 お好み焼き、巻きずし、御味噌汁、焼き鳥、餃子等を同校生徒が店員と客の役になり、日本語を用いて役割演技。日本語教室がお店となる。日本人学生は調理室でひたすら調理。午後、最後の「日本語授業」(11・12年生)(UNOを用いた日本語学習ゲーム)。
11	21日(金)	午前中(各ホストファミリーと市内観光)。14時に空港集合。16時20分にパース発、22時20分にバンコク着。
12	22日(土)	0時50分にバンコク発(予定)の搭乗案内直前に機体トラブルで離陸不可との連絡。1時間以上待合室で待たされた後、タイへの入国手続き(約1時間)の後、30分以上バスに乗り、航空会社が用意したホテルで入浴&仮眠(3時過ぎにチェックイン)。後、予定変更で予定が早まり、6時30分朝食、7時チェックアウトで空港へ戻る(ホテル滞在時間4時間弱)。 11時頃、バンコク発。17時頃、福岡空港着。解散。

が現状である（電子決済の時代にも関わらず旧態依然とした遅さ）。筆者の場合、大学の総務課を通じて9月3日に手続きを完了したが翌4日の支払期限には到底間に合わないということで、同校の日本語教師のシャロン先生にメールで知らせ了解を得た（シャロン先生には英語ではなく日本語でメールを送ることができたので助かった。また次年度以降は、もう少し余裕を持った日程で御請求頂くようお願いした）。

(3) 2018年度研修の総括

2017年度との研修内容の大きな違いは2点ある。第1が、厳格な幼稚園の先生が御退職で交替したことにより、幼稚園の授業見学が容易になったことである（前任者の先生は、幼児への悪影響を懸念し、幼児クラスに外部者の見学は1名と限定していた）。第2は、2016年度に参加した子ども学科4年生が、偶然「トビタテ留学 JAPAN 地域人材コース」にて再度渡豪し、同校にて研修中であり、初日のパース市内観光から1・2年組日本語クラスでの「手遊びゲーム（猛獣狩り）」、幼稚園クラスでの「福笑い」等の学生主催の活動に際して全面的に支援して頂いた点である。どれほど学生たちが助けられたか、頼りになる日本人の先輩がいた点が本年度（2018年度）の特記事項である。

以下、引率教員としての筆者の所見を記す。参加学生のうち女子学生2名は、当初、飛行機の乗り換えで、タイのバンコク国際空港での入国手続きにおいて、係官の英語の質問がわからず相当あせっていた（パニックを起こしかけていた）。オーストラリアに入国後もホームステイで英語がわからない、通じないであろうと非常に心配していた。しかし、研修を通じて、同校の先生方、児童・生徒・園児、ホームステイ先の御家族との意思疎通にも随分と慣れ、「英語があまり聞き取れない」ことにも徐々に慣れていった。

たかだか2週間で、英語のリスニング力の向上は望めない。但し、既存のリーディングやスピーキング、非言語コミュニケーション力を駆使すれば、十分に暮らしていけることを経験的に理解していったのであろう。

その際、なんとといっても、彼女らにとって（他の1名の海外慣れしている男子学生や、最早英語力の向上をあきらめ、非言語コミュニケーションと片言の英語で日々を乗り切ることに終始した筆者自身に

とっても）心強かったのは、日本語教員のシャロン先生の存在であった。

帰路、タイ航空の乗り継ぎ便の機体トラブルのため、急遽8時間程度、遅れることになったが、学生だけであつたら、相当混乱したと思われる（状況説明、食事開始時間、ホテルのチェックアウトや集合時間等に関する航空会社の指示不足と変更が相次いだので、真夜中であつたが、その都度、ホテルのフロントに確認し、起床時間を待って学生に指示した）。参加学生には、予定変更時にすぐに日本に連絡するよう指示したこともあり、福岡空港到着時に保護者にお会いしたが、特に心配されている御様子は無かつた。

以上の引率体験を踏まえ、「引率教員が必要と思われた場面」を改めて列挙しておく。

- ①往路。特に、海外旅行は初めてという学生にとっては、乗り継ぎのために空港内に滞在するだけで大きなストレスになる。そこで「英語が聞き取れない」、「搭乗口がわからない」等の学生の不安を解消する必要がある。
- ②第1週。ホームステイ先での実態把握（例：食事、放課後の暮らし）、マッチングの調整。不安と不満の解消を図る。日本語教師のシャロン先生だけだと対応は困難である（学生たちが、まだ慣れておらず本音を語らない。「大丈夫です。」、「本当はどうなの?」、「実は、少しだけ〇〇に困っています。…」というように丁寧に対応する必要があるからである。
- ③第2週。学生が実施する授業への支援。「手遊びは?」、「ゲームは?」、「時間が余ったら?…」。日本で準備してきたはずだが不十分なことに気づき、学生たちにあせりが見られた。また同校には「折り紙クラブ」があり、オーストラリアの小学生の方が得意な折り紙の種類もあり学生たちは大いに動揺した。
- ④復路。トラブルへの対応。トラブルが比較的多いと推測されるタイ航空からトラブルが比較的少ないと推測されるシンガポール航空への変更を検討すべきである。特に懸念されるのが、乗継便の出発が日本時間の深夜であり、本年度のようなトラブルが再び発生したとしても、迅速な対応が困難と考えられるからである。

5. 海外研修の意義－学生の成長を通して－

第1回（2016年度）に参加し、さらに「トビタテ留学 JAPAN 地域人材コース」第7期生として再度、2018年3月から半年間、同校にてインターンシップを行うこととなった女子学生（4年生）は、第1回の参加の意義について振り返り、次のように述べている。

1 なぜトビタテに応募しようと思ったか

昨年のインターンシップの影響がとても大きいです。昨年、西九州大学のインターンシッププログラムに参加しました。モンテッソーリ教育について少しずつですが学び進める中で、疑問に思う点が多くありそれを自分の中で発見し解決したいと思い応募しました。西九州大学に入学したからこそそのコミュニケーションの強さをとても実感しました。

〔西九州大学 HP【朗報】「トビタテ留学 JAPAN 地域人材コース」に本学学生が採択されました！ 2017/8/23

（<https://www.nisikyu-u.ac.jp/nagahara/topics/detail/i/344/>）より抜粋〕

この学生は、当時のインターンシッププログラムとしての2016年度研修に参加し、「モンテッソーリ教育について少しずつですが学び進める中で、疑問に思う点が多くありそれを自分の中で発見し解決したい」というように、モンテッソーリ教育についての既存知識と実際との違いに気付き、これを明らかにしたいという興味・関心・意欲を高め、「トビタテ留学 JAPAN 地域人材コース」に挑戦し、見事に選考試験に合格したのである。国内に留まっていたは得られない「比較」の視点を得たことが、この研修の意義であることが窺い知れる。

次に、第2回（2017年度）に参加した「学生の意見（抜粋）」は、以下の通りである（下線部は筆者による）⁴⁶。

- ・ホームステイを経験したことによって、食事、生活習慣、家族同士の触れ合いや時間の過ごし方等、日本とは異なる現地の方の生活に触れる機会を得た。自分の日常生活との違いに気づき、改めて自分の日頃の生活を振り返ることができた。
- ・研修開始当初は、子どもから話しかけられても理解することができずにいたが、日毎に聞き取れるようになっていった。特に1週間を経過した頃には、頭の中で日本語と英語を置き換えずに会話をしているようになっており、自分自身の変化に驚いた。英会話力が、徐々に向上していることを実

感できた。

- ・以前は英語を話すときに身構えていたが、研修の後半には初対面の方に対しても恥ずかしがらずに話すようになり、表情や仕草を交えながら会話を楽しめるようになっていた。
- ・Treetops モンテッソーリ校では、様々な学年の授業に参加することができた。授業見学を通して日本の授業の進め方との違いが見て取れたことは、教師を目指している自分にとって貴重な体験だった。
- ・滞在期間を長く設定されていたことによって、同一クラスで複数回にわたって研修をすることができた。それによって、教科毎の教材や指導方法にも触れることができた。また、個々の子どもの対応も観察することができた。
- ・発達障害の子どもも同じクラス内で指導されていたことから、障害のある子どもへの支援についても実際の授業場面で見学することができた。

園部ニコル国際交流センター副センター長が、第1回研修プログラムの目標としてまとめた5点（①教育制度の違い、学校制度の違い、第二ヶ国語としての日本語導入。②ホームステイを通して異文化交流・理解。③日常会話に触れる。④決まったトピックについて日本文化や社会について発表を行う。⑤ネットワーク構築）のうち、「④決まったトピックについて日本文化や社会について発表を行う」と「⑤ネットワーク構築」以外についての記述が見られる。但し、④については、現地において実施済みであるし、⑤についても、参加者同士のネットワークと現地のホームステイ家庭を中心とした国際的な個人間のネットワークが構築されている。従って、上記の目標5点は全て達成したと判断できる。特に、研修期間の増加が目標達成に大きく寄与したものと推察される。

第3回（2018年度）に参加した学生の意見（抜粋）は、以下のとおりである。2018年12月26日に子ども学科女子学生と心理カウンセリング学科女子学生に筆者がインタビューした（男子学生は所用のため欠席）。

質問事項「研修を通して学んだこと、自分の変化・成長について（振り返り）」

子ども学科、2年、女性（海外は初めて）（下線部：筆者）

- ・授業で少し学んでいたモンテッソーリ教育を実際に実践している場に立ち会い、様々な経験ができた。→幼稚園実習にも大変役立った。

- ・「イングリッシュ [本学佐賀キャンパスで毎週金曜日の昼休みに行われている英語を愛好する学生や留学生による集まり。イングリッシュとは英語（イングリッシュ）と昼食（ランチ）を合わせた造語]」に参加するようになった。
- ・友人に誘われて、スロベニア研修（春休みに実施されている海外研修、本学以外の大学の参加者も多い。引率教員も無）に参加することになった。
- ・海外に行く自信が生まれた。

心理カウンセリング学科2年、女性（小5と小6時に、嬉野市の行事で韓国へ。中3時に、家族でベルギーへ）

- ・海外の特別支援教育の実践現場に行きたかった。
→思ったよりも軽度だったけれども学ぶことは多かった。
- ・英語力をつけようとした。
→短期間では、大してつかなかったけれども学ぶことは多かった。
- ・困難に直面した時に、どうにかしようという力がついた。
- ・課題発見力がついた。
- ・1人で海外に行く自信がついた。
- ・心理カウンセリング学科の学生は内向的で、引っ込み思案の人が多いが、勇気を出して「一歩踏み出す」力がついた。
春休みに、タイ研修に、心理カウンセリング学科からは1名だけ参加することになった。

2018年度の参加学生（上記）の特徴は、2名とも今回の研修参加をきっかけに、2019年の春休みに別の海外研修に参加する点である。自信や「一歩踏み出す」力がついたといったコメントも見られる。帰路のトラブルを克服したことも影響していると思われるが、何よりも現地で出会った「トビタテ留学 JAPAN 地域人材コース」で再訪問していた4年生の女子学生の影響が最も大きいと思われる。

なお、心理カウンセリング学科の女子学生は、以下のHPにも感想を掲載しているので転載する。特別支援学校教諭をめざしていることより、特別支援の具体的方法へのコメントが詳しく書かれている。また、ホームステイ先の家庭での思い出を詳しく書いている。この学生は、当初、ホームステイ先での意思疎通ができるか、家族と上手く溶け込めるかどうか、最も心配していたのであった。無事に適応でき、不安が自信に変容したことが伺われる。

・心理カウンセリング学科 HP にある参加学生の文章より（下線部：筆者）

「モンテッソーリ教育を実践しているツリートップス学校で、教育インターンシップに参加してきました。この学校は、異学年学級編成をとっており、私は小学校3、4年生の混合クラスを見学しました。日本では授業中に児童同士で教え合うことはほとんど見られませんが、この学校では児童同士が教え合い学習をする様子が見られました。また、特別支援学級というものではなく、障害のある子も一緒のクラスで勉強するといった形でした。先生は2、3人いて、椅子に座って勉強に集中できない生徒のために バランスボールやソファ、仕切りのある机がありました。これらの環境によってみんなが自発的に勉強していて、向上心があるなど思いました。

日本語の授業も見学しました。日本のレストランをテーマに学び、最終日には実際に再現していました。巻きずしや、味噌汁、お好み焼き、弁当を、私たちが作り、生徒が店員とお客さんになって日本語を話す練習をしていました。

研修中はホームステイでした。一人で英語も苦手で話せない私に、ホースステイ先の家族はやさしく接してくれました。とてもフレンドリーな家族で、簡単な英語に言い換えて話をしてくれました。かくれんぼをして遊んだり、動物園や公園、滝など色々な場所に案内してもらったりしました。

初日は英語を話せないからどうしようという不安が大きかったけれど研修はあつという間で、最終日になると、まだオーストラリアにいたいという気持ちが大きかったです。研修を通して英語を聞いて理解できるようになっても話すときに伝え方がわからないといった体験もしたのもっと英語を頑張ろうと思うきっかけにもなりました。研修にいて知らなかったことを知れるのはもちろん自分のことを知り、新たな課題をみつけ将来を広げるきっかけにもなったので良かったです⁴⁷。」

その後、男子学生から「研修を通して学んだこと、影響を受けたこと」に関するメールが届いたので、以下に紹介する（2019年1月19日）。

オーストラリアで学んだことについてです。

労働についての認識の違いに驚きました。日本の学校の先生だと、残業が多かったり、家でも準備をしていたりというイメージがありました。でも、オーストラリアの教員は、家で準備を行った分はしっかりと報告をして、労働時間に反映がされていたとこ

ろに驚きました。

日本が遅いと言われている、カード社会化を肌で感じた。ホストファミリーで出かけて、現金での支払いを見たのが、日本での朝市のようなマーケットでだけだった。あとは、全てカードで支払いをしていた。

やはり、海外はとても楽しいということを改めて思いました。自分は日本が大好きです。だからこそ、自国との違いに気付いた時がとても嬉しいし、楽しいからです。

こういったことを学ぶことができました。

この男子学生は、海外渡航経験も豊富で、外国人留学生とも積極的に交流する等、異文化体験も多く、他の参加学生よりも精神的余裕が見られ。それゆえ日豪の教員の残業時間の取扱いの違いや、「カード社会」としてのオーストラリアの先進性や日本の後進性といった「社会の違い」にまで関心が広がったものと推察される。筆者の専門は社会科教育や国際理解教育であることもあり、このような自国社会との比較に基づく的確な指摘について感心した次第である。

6. おわりに一次年度以降の展望（教員引率が無くなる可能性、学部のカリキュラム改編への対応について）

本小稿では、オーストラリア幼小中高校一貫校における課題解決型海外研修について、前身の2016年度、子ども学部の行事となった2017年度、2018年度の実践報告を行なった。各期の参加教員や参加学生の意見等を紹介しながら、研修の意義についても明らかにした。

最後に、来年度以降も子ども学部の行事として実

施が想定されていることより、喫緊の課題を2点指摘しておきたい。

第1は、大学予算削減の関係で、次年度以降、教員引率が無くなる可能性も十分ある。それゆえ学生のみで研修を実施する方法について検討する方法がある。引率経験者の櫻井教授も筆者も、オーストラリアのシャロン先生も教員引率の必要性を切に感じているが、不測の事態を想定しておく必要がある。航空機の問題と、ホームステイ並びに学校での適応の問題の2点である（詳細については前述）。前者については、よりトラブルの起きにくい航空会社の選定とトラブル時の連絡網の構築が課題になると思われる。後者については、日本語担当のシャロン先生との連携が不可欠となる。メールや時には「スカイプ」等を活用してテレビ会議をする必要もあるかもしれない。

第2は、子ども学部のカリキュラム改編への対応である。まず大学全体の科目変更で、「あすなろう体験Ⅱ（実践）」から「あすなろうⅡ応用（地域課題）」へと移行する。さらに2019年度からの新カリキュラムへの移行により、特別支援学校の教員免許が心理カウンセリング学科から子ども学科へ移行予定である。もし、そうなった場合、2020年度より心理カウンセリング学科の2年生には、教員免許を取得予定の学生がいなくなるかもしれない。その結果、心理カウンセリング学科を含めた子ども学部の行事から子ども学科の行事に移行することも考えられる。要検討事項となるだろう。末尾に参考資料として表5（子ども学科「あすなろう体験Ⅱ（実践）」2018年度シラバス）を示した。

表5 子ども学科「あすなろう体験Ⅱ（実践）」2018年度シラバス

科目名	あすなろう体験Ⅱ（実践）	
開設学科 専攻・コース	子ども学科	
分類	共通教育科目 教養教育科目	
開講キャンパス	開講年次	開設期単位数必修・選択
佐賀	2年	通年1単位選択必修
授業の概要及びねらい	本科目は「あすなろう体験Ⅰ（基礎）」で身につけた明確な職業観を養うための基礎と社会人基礎力の知識を生かし、海外の園や学校での研修の希望者が、オーストラリア課題解決型研修（オーストラリアの幼稚園～高校の一貫校）への参加を通じて、職業人としての「総合的な社会的知性」を習得することをねらいとする。	

授業の到達目標	①キャリア形成のためのポートフォリオ作成能力を身につける ・大学生活を通じて経験する様々な課題を体験・克服していく過程を記録し、次への課題を明らかにすることができる ・これにより、社会人に必要とされる自律的能力を獲得する ②職業人としての「総合的な社会的知性」を習得する ・事前授業に参加し、海外での課題解決型研修への準備を行う ・幅広い職業観を身につけるとともに、社会人基礎力の理解を深める ③グループでの効果的な討議力や発表力を身につける ④活動報告会の企画・運営を行うことができる								
学習方法	正規時間内の講義・演習及び9月のオーストラリア課題解決型研修								
テキスト及び参考書籍	『あすなろう学－西九大生のための就業力育成BOOK－（西九州大学あすなろうセンター編）』、その他適宜資料を配布する								
	到達目標								
	汎用的能力要素				専門的能力要素				合計 (評価割合%)
	態度・志向性	知識・理解	技能・表現	行動・経験・創造的思考力	態度・志向性	知識・理解	技能・表現	行動・経験・創造的思考力	
		2)	2)	2)	2)		2)		
比率		20	20	20	20		20		100
宿題・授業外レポート		◎	◎	◎	◎		◎		40
授業態度				◎	◎				15
受講者の発表		◎	◎	◎	○		◎		10
授業の参加度		◎	◎	◎	◎		◎		20
その他		◎							15
	キャリア・ポートフォリオ								
合計									100
(表中の記号 ○評価する観点 ◎評価の際に重視する観点%評価割合)									
授業計画 (学習内容・キーワードのスケジュール)									
第1週	事前学習 (予習)	あすなろう体験Ⅰの内容を思い過去の体験をノートに整理してみる							
	授業	オリエンテーション							
	事後学習 (復習)	講義の要点をまとめておく							
第2週	事前学習 (予習)	テキストを読んでみる							
	授業	オーストラリア課題解決型研修に向けて① (コミュニケーション・マナー学習等)							
	事後学習 (復習)	講義内容の要点をまとめておく							
第3週	事前学習 (予習)	テキストを読んでみる							
	授業	オーストラリア課題解決型研修に向けて② (研修先調査研究等)							
	事後学習 (復習)	講義の要点をまとめておく							
第4週	事前学習 (予習)	テキストを読んでみる							
	授業	オーストラリア課題解決型研修に向けて③ (研修先調査研究等)							
	事後学習 (復習)	講義の要点をまとめておく							
第5週	事前学習 (予習)	テキストを読んでみる							
	授業	オーストラリア課題解決型研修に向けて④ (研修先調査研究等)							
	事後学習 (復習)	講義の要点をまとめておく							

第6週	事前学習（予習）	日本文化についての情報を調べ整理してみる
	授業	文化交流のために日本文化を学ぶ①
	事後学習（復習）	講義の要点をまとめておく
第7週	事前学習（予習）	日本文化についての情報を調べ整理してみる
	授業	文化交流のために日本文化を学ぶ②
	事後学習（復習）	講義の要点をまとめておく
第8週	事前学習（予習）	研修先の学校や、ホームステイ先の家庭の情報を調べ整理してみる
	授業	オーストラリア課題解決型研修の予定をたてる①
	事後学習（復習）	講義の要点をまとめておく
第9週	事前学習（予習）	研修先の学校や、ホームステイ先の家庭の情報を調べ整理してみる
	授業	オーストラリア課題解決型研修の予定をたてる②
	事後学習（復習）	講義の要点をまとめておく
第10週	事前学習（予習）	体験先についての情報を調べ整理してみる
	授業	オーストラリア課題解決型研修
	事後学習（復習）	体験についての気づきをまとめておく
第11週	事前学習（予習）	体験先についての情報を調べ整理してみる
	授業	オーストラリア課題解決型研修
	事後学習（復習）	体験についての気づきをまとめておく
第12週	事前学習（予習）	参加先の情報収集を行ってみる
	授業	講演，セミナー，ワークショップ等への参加・企画
	事後学習（復習）	体験内容をまとめておく
第13週	事前学習（予習）	討論会の準備をする
	授業	総合討論会（準備）
	事後学習（復習）	討論会に向けての改善点をまとめておく
第14週	事前学習（予習）	討論会の準備をする
	授業	総合討論会（個人発表，グループ討議）
	事後学習（復習）	個人発表，グループ討議を省察しておく
第15週	事前学習（予習）	討論会の準備をする
	授業	総合討論会（全体会）
	事後学習（復習）	全体会を振り返り省察しておく
第16週	事前学習（予習）	キャリア・ポートフォリオを記入しておく
	授業	総括（キャリア・ポートフォリオ更新，社会人基礎力診断テスト等）
	事後学習（復習）	1年間のまとめをノート等にまとめておく
備考	<p>本科目は、「オーストラリア課題解決型研修」に特化した科目であり，受講者は数名に限定される。受講者は，次のように決定される。</p> <p>①保育士，幼稚園教諭，小学校教諭のいずれかの免許取得をめざしている子ども学科の学生。</p> <p>②「グローバル・コミュニケーション（英語）」を既に受講し，単位習得した者。または同等の英語力がある者。</p> <p>③参加費（20万円程度）を払える者。</p> <p>④「オーストラリア課題解決型研修」の実施予定期間は，9月10日～19日の最長10日の予定である。</p> <p>⑤受講者は数名に限定される。受講希望者が多い場合は，面接，書類，成績等で選考を行う。</p>	

2018年度子ども学科「あすなろう体験Ⅱ（実践）」シラバスより（一部改変）。

【註】

- 1 園部ニコル・石田リカ「オーストラリア・インターンシップ 2016 報告書」西九州大学子ども学部教授会, 2018年1月19日(内部資料)より。
- 2 プログラムの運営と引率に事務サイドより関わった西九州大学職員石田リカ氏によれば, 4日間に圧縮された経緯は, 同校が小規模校で教員数にも限界がある, との同校からの申し出によるものである。
園部ニコル・石田リカ, 前掲内部資料より。
- 3 園部ニコル『平成28年度海外留学支援制度(協定派遣 短期研修・研究型)に採択された『Specialized Education, Health and Welfare Program for Global Awareness』And 平成28年度『Treetops インターンシップ』報告書, 2018年, 「はじめに」より。
- 4 園部ニコル・石田リカ, 前掲内部資料より。
- 5 心理カウンセリング学科の「あすなろう体験Ⅱ(実践)」の2018年度のシラバスの「授業の概要及びねらい」には, 「本科目では『あすなろう体験Ⅰ(基礎)』で身につけた社会人基礎力の知識を活かし, 企業インターンシップ・海外インターンシップへの参加を通じて, 職業人としての『総合的な社会的知性』を習得することをねらいとする。本科目は地域志向科目となります」と書かれている。
- 6 ツリートップス・モンテッソーリ&国際バカロレア学校 HP「Welcome To Treetops School」より。(http://www.treetops.wa.edu.au/) 2018年12月5日閲覧。
- 7 文部科学省 HP「国際バカロレアのプログラム」より引用。
(http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1308000.htm) 2018年12月5日閲覧。
- 8 独立大学行政法人 大学改革支援・学位授与機構「オーストラリアにおける第三段階教育」『諸外国の高等教育分野における質保証システムの概要オーストラリア(第2版)(2015年4月 NIAD-UE 作成)』2015年, p.11。同機構 HP (https://www.niad.ac.jp/consolidation/international/info/australia.html) より入手。2018年12月5日閲覧。また, ツリートップス・モンテッソーリ&国際バカロレア学校 HP「International Baccalaureate Career-Related Programme (CP)」によれば, TAFE への進学のため CP プログラムを提供していることが書かれている。
(http://www.treetops.wa.edu.au/international-baccalaureate-career-related-programme-cp/) 2018年12月5日閲覧。
TAFE とは, Technical and Further Education の頭文字からきている略称で, オーストラリア独自の州立の職業訓練専門学校を意味する。「TAFE について (TAFE 留学)」オーストラリア留学センター HP (https://www.aswho.com/tafe) 2018年12月5日閲覧。
- 9 文部科学省・教育課程企画特別部会参考資料4「国際バカロレア・ディプロマ・プログラムの導入を促進するための教育課程の特例措置について(案)」2015年6月22日, p.11によれば, DP 実施校は25校だが CP 実施校は0。
- 10 同校の日本語教員のシャロン先生の話に基づく。
- 11 文部科学省 HP「国際バカロレアのプログラム」より抜粋。
(http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1308000.htm) 2018年12月18日閲覧。
- 12 同上 HP より抜粋。2018年12月18日閲覧。
- 13 相良憲昭・岩崎久美子編著『国際バカロレアー世界が認める卓越した教育プログラム』明石書店, 2007年, p.24(吉田孝記述部分)。
- 14 福田誠治『国際バカロレアとこれからの大学入試改革-知を創造するアクティブ・ラーニング』亜紀書房, 2015年, p.218。
- 15 相良憲昭・岩崎久美子, 前掲書, p.30(吉田孝記述部分)。
- 16 オーストラリアの一般の高校においても, 最終学年の最終試験が秋に行われる。筆者がホームステイをしていたシャロン先生の御令嬢も試験準備のため, 休日の土曜日にも学校主催の補習授業に参加する等, 試験対策に追われていた。日本の受験生との共通性が見られ意外であった。
- 17 同校 HP「Welcome to Treetops School」より。
(http://www.treetops.wa.edu.au/) 2018年12月18日閲覧。
- 18 例えば, 長田勇, 立田佐武朗, 小松広子, 立田千陽子, 山根悦子, 堀澤理恵, 岩崎桂子「モンテッソーリ教育の核心」『小池学園研究紀要』No.12, 2014年, pp.63-80参照。

- 19 マリア・モンテッソーリ (K. ルーメル, 江島正子訳) 『児童期から思春期へーモンテッソーリの一貫教育ー』玉川大学出版部, 1997年。
- 20 マリア・モンテッソーリ, 同上書, p. 25。
- 21 マリア・モンテッソーリ, 同上書, p. 24。
- 22 マリア・モンテッソーリ, 同上書, pp. 26-35。
- 23 マリア・モンテッソーリ, 同上書, p. 38。
- 24 マリア・モンテッソーリ, 同上書, pp. 50-51。
- 25 マリア・モンテッソーリ, 同上書, pp. 117-121 [付録A「大地(地球)の子ども」より]。
- 26 マリア・モンテッソーリ, 同上書, pp. 127-132 (付録B「学習と仕事の計画」より)。
- 27 マリア・モンテッソーリ, 同上書, pp. 132-133。
- 28 マリア・モンテッソーリ, 同上書, p. 153 (訳者「あとがき」より)。
- 29 マリア・モンテッソーリ, 同上書, pp. 153-154 (訳者「あとがき」より)。
- 30 「Sharon Crossman」(<http://www.treetops.wa.edu.au/treetops-staff/>) 2019年1月7日閲覧。
- 31 園部ニコル・石田リカ, 前掲内部資料より。
- 32 櫻井琴音「海外出張(派遣)復命書」西九州大学子ども学部子ども学科, 学科会議, 2017年10月2日(内部資料), 「引率教員の所見」より。石田職員については, 註34を参照。
- 33 園部ニコル『平成28年度海外留学支援制度(協定派遣 短期研修・研究型)に採択された「Specialized Education, Health and Welfare Program for Global Awareness」And 平成28年度「Treetops インターンシップ」報告書』, 2018年。
- 34 園部, 同上書, p. 27。
- 35 園部, 同上書, p. 26。
- 36 子ども学科「学校インターンシップ」シラバス(2018年度)より。
- 37 櫻井琴音, 前掲「海外出張(派遣)復命書」より。
- 38 もちろん事前にホームステイ先の決定のため, 参加学生や引率教員は英語で「自己紹介シート」を送付し, ホームステイ受入れ家庭の情報も事前に送られてきている。しかし, 不明な点も多く不安になるものと思われる。
- 39 参加学生の興味関心は多様であり, 幼児教育や保育におけるモンテッソーリ教育の展開方法に興味を持ったり, 小学校低学年段階の発達障害を抱える児童への関わり方に興味を持ったりする等, 各学生の希望に応じて柔軟に授業見学が可能である。
- 40 櫻井琴音教授が記した電子メールの文章(2018年4月19日)より引用。
- 41 正式科目名は「Global Communication(English)」。この科目の目的は「英語・日本語による言語的・非言語的コミュニケーションスキルを育成」することであり, 海外留学に積極的に参加しようとする学生を増やすため, 2016年度に新設された。1学年の夏休みに集中講義として実施されている(全学科を対象に共通教育科目の選択科目として開講)。西九州大学シラバス参照。
- 42 「Australia ETAS Apply Service」HPより (<https://australia-etas.com/faq.php>) 2019年1月7日閲覧。
- 43 2019年1月7日8:44UTC 現在。(<https://www.google.co.jp/search>)
- 44 「オーストラリア政府移民局」HPより (<https://www.eta.homeaffairs.gov.au/ETAS3/etas>) 2019年1月7日閲覧。
- 45 2019年1月7日16:55UTC 現在。(<https://www.google.co.jp/search>)
- 46 櫻井琴音, 前掲「海外出張(派遣)復命書」より。
- 47 西九州大学子ども学部心理カウンセリング学科HPより (<https://www.nisikyu-u.ac.jp/topics/detail/i/2332/faculty/207/>) 2019年1月7日閲覧。